百万遍念佛考 (1)

……創唱と流傳……

坪井俊映

一

百万遍念佛信仰なるものは念佛を一百万遍唱えることによつて、淨土往生または穰災招福等の現世的な利益を願う信仰である。この念佛を唱うるに古來より二通りの方法がある。その一は一人で一七日、または十日を限つて念佛を百万遍唱えることであつて、一日に十万乃至十四・五万唱えて十日又は七日をもつて百万なる口稱念佛の數を滿じようとするものであり、その二は十人乃至はそれ以上のものが集つて一千八十顆の大念珠を廻わし、一顆を繰るごとに一稱して、百回廻らすことによつて百万の數を滿じようとするものであつて、これは十人またはそれ以上の人々の稱える念佛の數を總計して百万とするものである。現今、日本の各地において民間傳承として廣く行われている百万遍念佛は主として後者のものである。この百万遍念佛は主として先亡追善、家内安全、病氣平癒、無病息災等を祈念して行われるほか、農耕儀禮とも深く關係し、雨乞い、虫除け、虫送り、根付け、五穀豊穰のため

に行われ、その信仰内容において極めて呪術的性格の濃厚なものをもつている。(1)

かかる呪術的性格の濃い百万遍念佛信仰は日本における習俗慣習によつて永い傳承の中につくりあげられたものであつて、民俗信仰として特異のものである。かかる呪術的な百万遍念佛信仰は淨土教における念佛思想の本來的なものではなく、民間の習俗によつて特異な發展をとげたものであるが、百万遍念佛によつて淨土往生を願う信仰は平安時代の昔にまで溯ることが出來る。

惠心僧都は往生要集卷中の別時念佛を說くところにおいて(2)「又迦才淨土論云綽禪師檢二得經文一但能念佛一心不亂得二百万遍已去一者定得二往生一　又綽禪師依二小阿彌陀經七日念佛一檢二得百万遍一也、是故大集經藥師經小阿彌陀經皆勸二七日念佛一者此意明矣」といつて、阿彌陀經等にあかす一七日の念佛をもつて百万遍念佛とし、これを提唱した人は道綽禪師であるとしている。良忠は往生要集卷中義記第六に道綽禪師の檢得した經典について、木槵子經と阿彌陀經とであるという、和語灯錄日講私記(3)は「念佛百万遍百度申等とは凡そ百万遍に有二兩樣一掐二數珠一與二七日別時一也兩樣共に道綽禪師の檢得也」といつて、百万遍念佛の唱え方に二通りあるが、いづれも道綽禪師が檢得し創唱したものとする。かくの如く百万遍念佛の創唱者を道綽禪師なりとするのが古來よりの定說のようである。

このように、日本において百万遍念佛の提唱は惠心の往生要集にまで溯ることが出來、惠心僧都は迦才の淨土論によつて、この創唱を道綽禪師に擬し、近世に現われた淨土宗學者義山も日講私記において往生要集の說を踏襲して百万遍念佛は道綽の創說としているが、道綽禪師の安樂集並にその傳記を見ると百萬遍念佛を提唱した事實を見ることが出來ない。安樂集は觀經の要旨を述べたものであつて往生業として念佛三昧の行を說いているが、念佛の數量百万については論述するところを見出すことが出來ない。しかのみならず、後世いう如く百万遍念佛をもつて

往生業とする如き思想は見ることが出來ない。

しかしながら續高僧傳を初め、それ以後に著われた諸傳記に出る道綽の傳を見ると、師には數量念佛に關する信仰のあつたことが知られる。卽ち續高僧傳第二十に[4]「幷勸レ人念二彌陀佛名一或用二麻豆等物一而爲二數量一每二一稱レ名便度二一粒一如是率レ之乃積二數百万斛一者並以レ事邀レ結……又年常自業穿二諸木欒子一以爲二數法一遣二諸四衆一敎二其稱念一屢呈二禎瑞一……纔有二餘暇一口誦二佛名一日以二七万一爲レ限聲々相注弘二於淨業一云云」とあり、念佛をすすめるに麻豆をもつてその數量を計ることを敎え、また自行として木欒子の數珠を用い、さらに人に與えて念佛せしめ、その數量を計らしめたという。このように數量念佛をすすめたことは凡らく稱える念佛の數量の多い者ほど利益がすぐれているとする考えであろう。しかし傳記にはこの麻豆、木欒子による數量念佛を百万遍念佛とは稱していない。また、佛祖統記淨土立敎志第二に出る道綽傳は[5]「日以二七万遍一爲レ度勸二幷汾人一念佛或以レ豆記二所度一者及二万斛一」といつて、續高僧傳の說を踏襲しているが、戒珠の淨土往生傳中[6]には「念二彌陀佛一不レ知二其數一大汎日以二七万徧一爲レ度　幷汾之間風俗少レ事念佛持二數珠一者罕嘗有レ之　綽勉二僧俗念佛一無二數珠一者以レ豆記レ之　如二念一聲一卽度二一豆一或時麻麥記者亦然已而較レ之其所度者數万斛」とあつて數珠をもつて念佛せしめ、數珠なきときは麻麥豆等でその數を計らしたという。

また往生西方瑞應剛傳[7]には「三縣七歲並解二念佛一自穿二槶樹一勸レ人念佛語常含笑」といい、袾宏の往生集[8]には「人各掐レ珠稱二佛號一或時散華響彌林谷六時禮敎初不二廢缺一念佛日以二七万一爲レ限」といつて、日に七万遍の念佛が盛んに行われたとしている。

かくの如く道綽は自から日に七万遍の念佛を唱えるばかりでなく、人にすすめて念佛せしめ、その念佛の數を算

えるに麻豆麥を用いるか、數珠を使用せしめたか、その數える道具に異なりはあるが、念佛に關し數量信仰をすすめたことは諸傳の一致する所である。しかし惠心の往生要集にあかす如く百万遍念佛をもつて往生業とし、また自己の勸める念佛を自から百万遍念佛と稱したことは見ることが出來ない。されば何人によつてかかる數量念佛に百万遍念佛なる名稱が與えられたかというに、上記の惠心の往生要集中末に出る念佛百万遍の文は迦才の淨土論の說をそのまま引用し、百万遍念佛は道綽禪師檢得とするが、道綽には數量念佛の信仰はあるが、これを百万遍念佛とは稱していないから、この創唱は道綽とすることは出來ず、これ凡らく百万遍念佛は道綽の檢得という淨土論の著者迦才の創唱であろうと思う。

二

迦才の傳記は明らかでない、著書として淨土論三卷が傳わつているのみであるが、道綽の後輩であつて善導とほとんど同時代の先輩と考えられる。淨土論一部に亘つて道綽に關する記述が多いから淨土教については道綽より大きな影響を受けていたと考えられる。淨土論には百万遍念佛について五ヶ處程說明があるから今煩をいとわず列記する。

一、念佛者復有二種一是心念二是口念……二口念者若心無レ力須二將レ口來扶一將レ口引レ心令レ不二散亂一如二經說一若人念二阿彌陀佛一得二百万遍已去一決定得レ生二極樂世界一　綽禪師檢二得此經一若能七日專心念佛卽得二百万遍一也由二此義一故經中多讚二七日念佛一也(9)

二、第三小彌陀經云……(一七日念佛の經文)……釋曰依二此經一少善根是空發願　廣善根是七日念佛若能七日念佛

滿二百万遍一卽得二往生一也[10]

三、若人聞下說專二念阿彌陀佛一得中レ生淨土上卽須懺二悔惡業一修二習善根一持戒淸淨專二念佛名一一心不亂至二百万遍一者臨二命終時一正念現前佛卽來迎此是易往、若有二衆生一聞レ說二阿彌陀佛一仍故造レ罪雖レ念二佛名一心緣二五欲一此是雜結念臨二命終時一心卽顚倒佛不二來迎一此是無人也[11]

四、問曰經雖レ說二七日念佛既得二往生一未知念二幾許佛名一得二往生一也　答曰如二綽禪師一檢二得經文一但能念佛一心不亂得二百万遍已去一者定得レ往生一　又綽禪師依二小阿彌陀經七日念佛一檢二得百万遍一也是故大集經藥師經小阿彌陀經皆勸二七日念佛一者此意明矣[12]

五、問曰衆生罪業甚久積レ山云何十念得レ滅二爾所許惡業一縱令至二百万遍一終是太少　若不二滅盡一云何惡業不レ滅而得レ生二淨土一　答曰……[13]

これらの中いづれの文を見ても念佛百万遍することによつて決定して極樂世界に生ずることが出來るといつて百万遍念佛をすすめている。而てこの百万遍念佛とは阿彌陀經に說く一七日の念佛であつて、七日間相續する念佛の總計が百万の念佛であるというのである。淨土論の考えによると、この百万遍念佛は道綽の檢得というが上記の道綽の傳によると道綽は自から日に七万遍の念佛を行じ、また人にすすめて行わしめたというから、一七日の念佛は五十万（四十九万）となつて百万にはならない、從つて一七日で百万の數を滿そうとすればこの倍數の念佛を唱えなければならない。

從つて、迦才の淨土論には明瞭に百万遍念佛による淨土往生の說が出ているからして、念佛に對する數量信仰は道綽の提唱する處であるが、數を百万に限つて口稱念佛による淨土往生を說いたのは迦才の淨土論とすべきてあろ

う。

而て迦才は初唐の人であつて長安弘法寺にあつて淨土教の宣揚につとめた人であるが、彼が百万遍念佛を創唱するに至つた理由として、直接には道綽が日に七万遍の念佛を稱え、念佛の數量信仰を鼓吹したことによるのであろうが、それと共に當時次第に興隆しつつあつた密教の神呪（陀羅尼）誦持の信仰をも見逃すことが出來ない。當時までに神呪誦持の功德を說く陀羅尼經典として、かなりのものが譯出されているが、その中智通は唐高宗永徽四年（六五三）に觀自在菩薩隨心陀羅尼經一卷、千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼經等の神呪經典を譯出している、このうち隨心陀羅尼經は陀羅尼の念誦十万遍なれば八万億劫生死の重罪を滅し、三十万以上なれば菩薩道を成じ漸進して成佛すといつて、陀羅尼念誦に關して數量信仰を說き多く念誦するほど利益がすぐれているとする。

また北齊那連提黎耶舍の譯と云われる[14]拔一切業障根本得生淨土神呪には「滿二十万遍一則菩提芽生不二退轉一誦滿三十万一則面見二阿彌陀佛一決定得レ生二安樂國一」とあつて神呪を三十万遍念誦することによつて淨土往生を得るという。唐西明寺道世の撰述した法苑珠林第六十には彌陀陀羅尼について[15]「此之神呪先已流行功德利益不可說盡」と說いて阿彌陀佛神呪の誦持による淨土往生信仰の相當廣まつていたことを傳えている。しかのみならず法苑珠林第六十[91]によると迦才の住せし長安弘法寺の初代住僧と目される靜琳法師は笈多三藏と釋彥琮とが共譯した千轉陀羅尼神呪を別院の道場において受戒の沙彌及び道俗に授けて相續せしめたという。この千轉陀羅尼經には「欲レ生二淸淨國土一者晝三夜三一一時中各誦二二十一遍一至二二十一日一如二其所欲一卽得レ如レ意我見金色佛像菩薩形像卽是先相命終己以便生二菩薩大集中一」とあつて、晝三回夜三回、一回に二十一遍づつ千轉陀羅尼を誦し二十一日間相續するならば所欲の如く淸淨佛國に生ずることが出來るという。迦才は靜琳法師の住せし弘法寺に住していたのであるから、直

接の師弟關係の有無については明らかでないが、兩師の間に直接か間接か何等かの關係のあつたことは充分に想像される、從つて靜琳法師の神呪誦持の數量信仰と迦才の百万遍念佛思想とは何等かの關係のあつたことは充分に考えられる。

元來密教の神呪陀羅尼信仰なるものは、これを誦持することによつて何等かの利益を蒙ろうとするものであつて、神呪を誦持する數量を重視して、誦持する期間についてはあまり重く考えないのが一般的である。しかるに淨土經典にては　阿彌陀經は一七日の念佛、無量壽經は十日十夜の作善、觀經にては上品上生は三心具足の一七日の行を說く等いづれも　念佛を修行する期間、時間を重視する。從つて道綽が日に七万の念佛を稱へ、豆麻を用いて念佛の數を計らしめ數百斛に達したということは念佛を唱へる期間よりも數量を重視したことであつて、密教の神呪陀羅尼信仰と同じ基盤に立つた考えと評することが出來る、卽ち道綽のいう念佛の數量信仰は密教の神呪誦持の信仰の影響によるところ大なるものがあると評することが出來る。而て迦才が道綽の後を受けて百万遍念佛を創唱したことも、上記の神呪經典が陀羅尼の二十万、三十万誦持の功德を說くに對し百万なる數をもつて來たのであろうと思う。

さらに迦才が念佛の數量を百万なる數に限定したことについて、知俊の迦才淨土論餘暉鈔文句第三に[18]「如經說若人念阿彌陀佛得二百万遍已去一決定得生極樂世界」なる淨土論の文を尺して「如經說」とは木槵子經なりという。木槵子經は東晋時代（三一七―四二〇）の失譯經典であつて、これには佛法僧の三寶の名を唱えるに木槵子によつて數を算え一百万遍に滿れば百八の結業を斷除し無上果を得るという。道綽が木欒子によつて數珠をつくり數量念佛を勸めたことは上記の道綽傳に出るところであるが、木欒子も木槵子も同じ意圖に用いられ、また兩者同じものの

如く考えられるから、道綽には木槵子經による百万遍念佛の語はなく、ただ念佛の數量信仰を說くのみであるが、迦才が淨土論において道綽の後を受けて念佛の數量信仰を說き、これを百万遍念佛と號したことは道綽によつて用いられた木槵子經の百万遍稱佛名の思想によると考えられる。しかしながら、この百万なる數量を提唱するに至つた契機として密敎の神呪二十万遍、三十万遍の信仰によるところ大なるものがあると思われる。

三

上述の如く道綽禪師が經文を檢得して百万遍の念佛を提唱したという迦才淨土論の說は　惠心僧都の往生要集にそのまま引用され、大文第六別時念佛を說く中の尋常別行をあかす處において一七日の念佛を以て百万遍念佛なりとしている。大江匡房の續本朝往生傳の權少僧都源信の傳には[19]「惠心僧都事、廿五三昧過去帳云　長和二年正月一日所レ著願文云生前所二修行一法今畧錄レ之　念佛二十俱胝（億）遍　奉讀大乘經五千五百卷　法華經八千卷　阿彌陀經一万卷　般若經三千餘卷也　奉念大呪百万遍　千手呪七十万遍　尊勝呪三十万遍　并阿彌陀不動光明佛眼等呪少々也」とあつて惠心僧都は示寂する四年前卽ち長和二年七十二才までに行つた念佛が二十億遍、大呪百万遍、千手呪七十万遍であつて、念佛並に密敎の神呪等に關し深い數量信仰のあつたことを傳えている。しかし、この廿五三昧過去帳にある願文には百万遍念佛幾度という記錄の見られない處より惠心僧都に數量信仰のあつたことは知ることができるか百万遍念佛については關心が無かつたようである。平安時代において法華信仰と共に盛行したのは密敎の神呪信仰であつて、東台兩密の盛行によつて神呪陀羅尼の功驗を信ずる信仰は上下貴賤を問わず廣く流行した。

神呪誦持の信仰は神呪を誦持する數量の多小によつて功德に大小ありとする信仰であつて、惠心僧都が生涯修行

した法として念佛の他に多くの眞言密呪の誦持をあげるのみならず各種の經典讀誦をも列しているところより見るに、惠心は極めて雜信仰の人であつたということが出來る。かくの如く雜多な修行を數多く行ずるということが平安時代中期以降の一般風潮であつて、拾遺往生傳[20]に出る尼妙法は四十二年の間、毎日阿彌陀經六卷　法華經四要品　仁王經護國品各一卷　觀音經十卷　念佛一万遍を唱え　その他に小豆をもつて念佛の數を計り凡そ五十七斛三斗あつたという如きはその一例である。

また、念佛に關する數量信仰も盛んであつて、諸種の往生傳を見ると、續高僧傳に道綽が麻豆をもつて念佛の數を計つたと傳えられるが、これと同じ樣に小豆をもつて念佛の數量を計つたものあり、上記の尼妙法は小豆をもつて念佛を數え五十七斛三斗と傳える他に、入道忠犬丸は念佛を修するに小豆をもつて遍數となし一千斛を限りとして漸く七百斛になつたといい、比丘尼妙蓮は小豆をもつて彌陀寶號を數え一石五斗を滿じ、この小豆を彌陀佛像中に安置すといい、出羽の永尋は正修念佛の數三十五石あつたことを傳え、伯耆の沙門重怡は大治二年三月より保延六年八月まで前後十三年四千日の間、毎日彌陀寶號十二万遍を唱え小豆をもつてその數を計り二百八十七石六斗になつたといい、さらに木槵子を箱に入れて佛前に置き參詣人にすすめて念佛せしめ、總計三千五百五十七石九斗になつたという等念佛に關する數量信仰が廣く行われていたことを知る。

これらは、ただ念佛の數量の多きを記するのみであるが、百万遍なる數量を意識して念佛を唱えたものに、後拾遺往生傳中[21]に出る永暹は毎日の所作は法華經一部、三時供養法、念佛一万遍を行ずる他に、天王寺において衆徒に囑して彌陀經四十八卷を讀むこと四十八ケ度に及び念佛百万遍に滿つること幾度びか知らずといい、三外往生傳[22]には延曆寺阿闍梨教眞は生年三十以後毎月二度百万遍念佛を修したといい、本朝新修往生傳には三善爲康が康和元年

九月十三日天王寺に參詣して正修念佛し九ケ日をもつて百万遍を滿じたといい、高野山往生[23]傳には紀州の調御房定嚴なるものが毎月十五日に百万遍念佛を修し十五ケ年間これを繼續したという等百万遍なる念佛の數を意識して行じた人の多くあつたことを傳えている。

かくの如く平安中期以降淨土信仰の盛行にともなつて數量念佛が廣く行われ、また百万なる數を限つて念佛を勵むものもあつたが、これらの百万遍念佛信仰は一人が數日間かかつて稱えるものであり、また、この百万なる數は實際に數えられたらしく、念佛を多く唱えたことを百万なる數をもつて形容したもので無いようである。藤原兼實はしば〳〵百万遍念佛を行じた貴族であるが、玉葉によつてその後を見るに、安元二年九月八日の條に「終日文書沙汰　入レ夜始ニ念誦一是阿彌陀名號也至ニ于來十五日一可レ奉レ滿也　依ニ小阿彌陀經說一也但除ニ念誦之時一之外雖レ不ニ無言一不レ聽ニ世事一念佛之間雖レ專ニ信力一爲ニ凡夫之妄心一隨ニ境界一易レ亂不レ及ニ一心不亂一爲レ之如何、今夜千返」とあつて、安元二年九月八日より十五日まで阿彌陀經の一七日念佛の說によつて百万遍念佛を行じている。しかし實際念佛百万を滿じたのは十八日であつて前後十日間かかつて百万の念佛を唱えたようである。いま玉葉によつて、毎日の念佛の數を列記すると次のようである。

九月八日一千返。　九日終日念佛〔今日、九萬九千遍〕。　十日(欠)　十一日終日念佛〔今日十二萬五千遍〕。十二日〔今日念誦十三萬遍〕。　十三日〔今日念誦七萬遍、夜入兩下〕。　十四日〔入レ夜雨下念佛六萬遍〕。　十五日今日終日無言念佛十五萬遍。　十六日〔今日念佛十萬遍〕。　十七日今日念佛十萬遍。　十八日今日念誦十四萬遍滿ニ百萬遍ニ了

この念佛の總計は九十七萬五千遍となる。このうち玉葉には九月十日の記事を欠いているから、もし十日に二萬

五千の念佛を行つたとすれば總計百萬の念佛となる、この他に玉葉を詳細に見ると、これを「恒例念佛」「恒例毎年念佛」といつて、毎年九月八日より十五（或は四）日まで百萬遍念佛を行つているのであつて、元暦元年以後は一ヶ月早めて毎年八月八日より一週間に亘つて念佛を行じている。なぜ兼美がかかる八・九月に百萬遍念佛を行つたかは知ることが出來ないが、玉葉に十五回も百萬遍念佛を行つたことを傳えている中、實際に百萬の數を滿じたのは先きの安元二年と嘉永元年と同二年との三回のみであつて一番少ない時は三十萬しか唱えておらず、遍數を記錄しない年もあつて、實際に一人でもつて百萬遍念佛の數を滿じることは中々容易なことでないようである。四十八卷傳第十卷に後白河法皇の百萬遍念佛修行について「後白河法皇ひとへに上人の勸化に歸しまし御信仰他にことなりしかば百萬遍の御苦行　二百餘箇度まで功をつみ、比類なき御事にてぞましましける」と評するごとく百萬遍念佛の行を積むことは實に苦行に等しい行であり、また「比類なき御事」と特記される程の特異の行であつた。

兼實はこの百萬遍念佛を唱えることをしば〳〵念誦といつて密教の神呪の誦持と同し言葉を使用するのみならず、また無言念佛をも行じ、その念佛の數量を計るに念珠を使用し、念珠を使用しないときは香を焚いて數量を算えたという。

かくの如く兼實は毎年初秋に百萬遍念佛を行つたが、この他に愛染王呪の萬遍念誦をも行じているのであつて、承安四年九月廿五日の條に「自二今日一始二念誦一愛染王呪三十萬也……今日二萬遍也」といい、十月一日まで七日間に亘つて三十萬遍の念誦を行い、治承四年三月四日の條には「今日愛染王百萬遍終レ功了。　自二去年十二月一日一始レ之今日九十一日也」といつて年末より九十一日かかつて愛染王呪百萬遍を唱えている。この他に玉葉には眞言陀羅尼の念誦一萬、或は五千等という記事がかなりあつて、念佛と眞言陀羅尼とを同一視して唱えている。この例は

上記の惠心僧都の行業の上にも見られ、また拾遺往生傳中に出る伊豫法樂寺の老尼安樂が毎日彌陀名號五萬遍、觀音眞言五千遍、光明眞言千遍となえたという如く、これは平安中期以降における社會の一般信仰であつて、眞言念誦は主として現在安穩のため、念佛は後生淨土往生のために唱えられたのであろう。

而て、これらの百萬遍念佛、百萬遍陀羅尼念誦の信仰は自行として一人のものが日數をかけて唱えたものであるが、中右記　長治二年三月三十日の條を見ると[25]

今日公家御祈被始行事等

……尊勝陀羅尼百萬遍　敦兼朝臣

仁和寺　五十萬　在僧各五十口

高野寺　五十萬

とあり、これ凡らく仁和寺の僧五十人で五十萬の尊勝陀羅尼を念誦し、高野寺の僧五十人で五十萬、總計百人で百萬の陀羅尼を念誦せしめたことをいうのであろうと思うが、既にこの院政時代になつて百萬の陀羅尼を念誦するに多くの人の合唱の總計をもつてその數を滿たす考えがあつたようである。百萬遍念佛についても、これと同樣に念佛の合稱の總計をもつて百萬遍念佛を滿じたという記事は見出すことが出來ないが、玉葉に出る兼實の毎年恒例の百萬遍念佛が一人の行として中々容易ならざる念佛修行であるから、念佛信仰が廣く一般民衆に侵透すると共に上記の尊勝陀羅尼百萬遍念誦と同樣に多く人々によつて唱えられた念佛の總計をもつて百萬遍念佛とする信仰の生ずることは充分に推側されることである。

融通念佛緣起に良忍上人が天治二年勅召により禁中にて融通念佛會を開き、鳥羽上皇、待賢門院を始め公卿百僚

がこの會に加入して日課念佛を誓受したとある。この宮中融通念佛會の歴史的眞實性については疑問があるが、[26] この融通念佛なるものは多人數のものが稱える念佛の功德を唱える一人一人が領受し、その總和の功德の融通することを說いたものと思われるから、これは念佛の數量信仰の發展したものと思われる。四十八卷傳第十七の眞如堂追善の卷に「上人（法然）の第三年の御忌にあたり御追善のために建保二年正月　法印（聖覺）眞如堂にして七箇日のあいだ道俗をあつめて融通念佛をすすめられける」とある融通念佛も多くの人々が會して共に念佛を唱える念佛會のことをいうのであろう。融通圓門章に「億百萬遍非多非少是名二事理不二不可思議功德往生日課一　日課百遍互融億百……」とある日課百遍互融して億百となるとは多くの人の唱える百遍の念佛の總和が億百となるという意に解するならば、融通念佛なるものは、念佛の數量信仰の發展したものと考えることが出來る。それは一人で數十萬乃至一百萬遍唱える替りに多く人によつて念佛を唱和し、その唱えた念佛の總和を念佛會に參加した一人々々が領受する念佛信仰である。遊觀の融通圓門章の釋はこれを華嚴の教相をもつて解釋したものであつて後世の理論付けである。なお念佛の數量信仰と融通念佛との關係は項を改めて論ずることにする。

上述の如く淨土經典に說く一七日の念佛をもつて百萬遍念佛としたのは迦才淨土論の說であつて、迦才はこれをもつて淨土往生の業とした。道綽は念佛に關する數量信仰は說いているが百萬遍なる數量は未だ定めておらず、これを定めたのは迦才とすべきであろう。而て道綽迦才がかかる念佛信仰を說くに至つた所以のものは密教の神呪誦持の信仰であつて、日本においても密教と淨土教の盛行は數量念佛信仰を盛んならしめ、この中より融通念佛の思想が生れるに至つたと考える。

註

（1）佛教大學民間念佛研究會編、民間念佛研究資料集第一輯五六頁以下

（2）往生要集中末（淨全十五卷一一〇頁）

(3) 和語燈録日講私記（浄全九巻七九五頁）
(4) 續高僧傳第二十（正蔵五十二巻五九四頁）
(5) 浄土立教志第二（續浄十六巻一六五頁）
(6) 戒珠浄土往生傳（續浄十六巻三九頁）
(7) 往生西方瑞應刪傳（續浄十六巻五頁）
(8) 袾宏往生傳（續浄十六巻二二五頁）
(9) 名畑應順博士校訂迦才浄土論上（三七頁）
(10) 右　同　上　（五九頁）
(11) 右　同　上　（一一三頁）
(12) 右　同　下　（一一四頁）
(13) 右　同　下　（一一五頁）
(14) 望月佛教大辞典（七一頁）
(15) 法苑珠林第六十（正藏五十三巻七三五頁）
(16) 法苑珠林第六十（正藏五十三巻七三五頁）
(17) 吉岡義芳博士の「佛教と道教」によると隋唐時代に老子五千文の萬遍讀誦によつて初めて功徳があるという信仰が廣く行われていたというから浄土教の數量念佛信仰もかかる社會一般の傾向に準じたものと考えられる
(18) 知俊浄土論餘暉鈔文句三（續浄七巻一四八頁）
(19) 續本朝往生傳（續浄六巻二三頁）
(20) 拾遺往生傳中（續浄六巻七〇頁）
(21) 後拾遺往生傳中（續浄六巻一一四頁）
(22) 三外往生傳（續浄六巻一四一頁）
(23) 高野山往生傳（續浄六巻一七六頁）
(24) 玉葉二十一巻（第一巻六〇四頁）
(25) 中右記三（二一頁）
(26) 塚本善隆著、融通念佛宗開創質疑（日本佛教学會年報第二十一巻一七五頁）
(27) 融通圓門章（佛全六四巻一一頁）